

Title	<書評> Aircraft Stories : Decentering the Object in Technoscience, Duke University Press (2002)
Author(s)	久保, 明教
Citation	年報人間科学. 26 p.325-p.330
Issue Date	2005-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25877
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

*Aircraft Stories :
Decentering the Object in Technoscience*

John Law
Duke University Press (2002)

久保明教

人類学の歴史は近代とともにある。しかし今日では、近代社会に属する人類学者が非近代社会を調査するという枠組自体が疑問に付されている。人類学は何を対象とすべきか、この問いに対する解答を再構築することは緊急の課題である。

ルイ・デュモンによれば、近代的な概念では理解できない人間社会の事象を「迷信」や「無知」として切り捨てるのではなく、近代的な概念をより適切な理解を可能にするような概念へと作り変えていくことによって人類学は発展してきた(デュモン 1993:17)。従来は、「近代的な概念では理解できない人間社会」とは「未開」と言われる社会に限定されてきた。近代的とされる社会での人類学調査も行われてきたが、その多くは近代社会の片隅に生息する非近代的な社会関係に焦点を当てたものである。

アクターネットワーク論(ANT)の主導者の一人であるブルーノ・ラトゥールは、近代はそれ自身が行っていることを正確に表象したことは一度もないと論じた(Latour 1993:47)。彼によれば、近代の自己表象と実践は常に乖離しており、それによって近代社会は機能してきた。つまり、近代的とされる社会においても近代的な概念は人々の実践から乖離しているのであり、その限りにおいてデュモンの言う人類学的研究の対象となりうる。

もちろん、従来の人類学の手法をそのまま近代社会に適用することができないわけではない。また、ANTと人類学の理論的前提には多くの違いがある(註)。しかし、近代社会に非近代的な実践を見出すANTを人類学と接合することによって、近代と非近代という分

割が疑問視される今日の状況をよりの確に理解できる人類学が可能になると筆者は考える。

ラトゥールやミッシェル・カロンと並びANTの主要な推進者とみなされている英国の研究者ジョン・ロウによって書かれた本書は、英国で1950年代に開始され、労働党の政権奪取により破棄されたTSR2計画についての理論的な要素を含んだ事例研究である。

TSR2とは長距離飛行と核爆撃が可能な戦術攻撃偵察用飛行機の名であると同時に、政治、軍事、科学技術、飛行機産業など多くの領域と結びついた巨大なプロジェクトを意味する。ロウは、TSR2計画を構成する多様なテキストを、近代的な「プロジェクト」を遂行するパフォーマティブな物語として捉えた上で、その批判的読解を試みていく。

鍵となるのは「フラクショナルリティ」(fractionality)という概念である。それは単数であり同時に複数であるような事物の性質を指す。フラクショナルな事物は、単数性と多数性の間で振動し、その効果(effect)として事物の単一性を生み出す。その振動のロジックを明らかにすることによって、事物に中心的な本質があると仮定する近代的なプロジェクトの語りではないかたちで事物を語る事が可能になることをロウは提示していく。

本書の全体的な構成を示しておこう。まずフラクショナルリティという概念が提示され(1章)、客体としてのTSR2と、それを研究する主体としてのロウ自身のフラクショナルリティが明らかにされ

る(2章、3章)。我々は事物のフラクショナルな性質を排除する文化的バイアスの下にあるのだが(4章)、事物の中心性はフラクショナルな事物の振動によって生み出されることが技術的(5章)、美学的(6章)、政治的(7章)領域において確認される。プロジェクトは、近代的な語りにおいては単一の起源と発展の軌跡を描く樹木状の物語として描き出される(8章)が、実はフラクショナルな事物の配置に支えられており、そのロジックを明らかにすることで政治的な諸問題に介入できるとロウは主張する(9章)。

フラクショナルリティの概念を序論となる1章で提示したあと、ロウはそれをTSR2という客体(object)に見出していく(12-37)。分析の対象となるのは、TSR2を製作したブリテッシュ・エアクラフト・コーポレーションの60頁に及ぶTSR2販売用の冊子である。ロウは、TSR2について何の予備知識も持たない読者を想定し、冊子を解読する。

冊子中の文章や画像は次々に「何か」について語る。それは、総合的兵器システムであり、遠距離調査機であり、地図作成機械であり、燃料システムである、と。これらは、無知な読者にとっては相互に無関係な断片にすぎない。しかし冊子は、いくつつかの「整合」(coordination)の戦略によって、これらの断片をまとめあげ、TSR2というひとつの客体を生み出す。例えば、冊子の目次はひとつのタブローをなし、異なる要素を一つの階層構造の中に位置付ける。また、冊子に描かれた写実的あるいは記号的なTSR2の諸画像は、

共通の特徴を持たないにもかかわらず一つの実体としてのTSR2を構成する。

このような整合の戦略が遂行されたあとでは、個々の事物の多様性はTSR2という一つの客体を異なる視点からみた結果としてみなされるようになる。ロウは、そのようなパースペクティブ主義を否定し、複数の客体が生み出され、それらがいかに結び付けられることで単一の客体が現れるのかを問う、記号論的かつ存在論的な立場に立つことを宣言する(35)。

フラクショナルな性質はTSR2だけでなく、それを研究するロウ自身にも見出される。彼は、1985年に行われた英空軍の展示会でTSR2を見た時、本書のもととなる研究の着想を得ている。

そのとき彼は、科学技術研究の格好の事例を見つけたと感じたが、それだけではなかった。彼にとって計画廃棄の記憶は、核軍縮への第一歩としての輝かしさと、戦闘機の力強く勇敢なイメージに惹かれていたがゆえの落胆の感情と結びついていた。

研究者としてのロウと、核軍縮を願いながらも戦闘機の勇敢さに惹かれるロウ、両者はふつつ社会と個人の名の下に区別される。社会科学は前者によってなされるものとされ、後者は個人的な問題として切り捨てられる。しかし、ロウはノルベルト・エリアスやミシェル・フーコーを援用しながら、個人と社会の区別は西洋の「文明の過程」が生み出した効果にすぎないと主張する(36)。

この時、ロウが語ることができるのは、科学技術研究の物語でもあり、戦闘機の美的な魅力に関する物語でもあり、政策決定の物語

でもある。モダニズムが依拠する単一の大きな物語でも、ポストモダニズムが依拠する断片的な小さな物語でもなく、これらの異なる物語が重なり合ってつくる語りの織物をロウは提示する(37)。

一方、モダニズムの語りは、混交性を無視することによってプロジェクトの純粹性を確保する。その基本的な戦略は、第一に起源から発展へと向かう時間軸上に事物を配置する系譜学であり、第二に異なる要素を一つの計算可能な空間において関係付けるシステム論であり、第三に複数の解釈の可能性をそれらの深層にあると想定される社会的利益へと回収する解釈学である。三種の語りの戦略は、現実の多様性を一つの系譜、一つのシステム、一つの利益へと回収していく。こうした戦略へ向かう傾向は、研究者の語りにも研究対象となる人々の語りにも見られる。我々には複数性や非連続性を否定する文化的バイアスがかかっているのだ。

そのバイアスを逃れた時、プロジェクトの見かけの単一性の背後にあってそれを支えているのが、語りの織物による混交的な事物の配置であることが見えてくる。この配置のメカニズムを、ロウは三つの立場から飛行機に対峙することで明らかにしていく。

第一に、飛行機は技術的なエンジニアリングの対象とみなされる。TSR2の前身となった戦闘機P17Aの冊子は、機体デザインを一つの式によって規定する。式は機体速度、音速領域での揚力勾配、機体重量、翼の表面積などの要素からなる。重要なことはそれらの要素が、突風時に機体にかかる負荷(Gと表記される)を最小限に押さえるように調整されていることだ。冊子によればその理由は

「様々な飛行機の比較によって、(中略) 快適な飛行を保証するのにもっとも貢献するのがこのパラメーター(G)であると断定できる」からである。何故Gを最小限に留めることが「快適な飛行」を保証するのは冊子には書かれていない。しかし、P17Aを製作したイングリッシュ・エレクトリック社の内部文書には「頻繁な振動や突風による機体構造の乱れは、乗員に冷や汗をかかせ、吐き気を催させ、疲労させ、仕事の遂行を妨げる」と記述されている(97)。

つまり、機体にかかる負荷は現実の飛行において乗員に肉体的かつ精神的な動揺を与え快適な飛行を妨げることが暗黙の前提となっているのだ。パイロットの吐き気は現実の飛行においては現前するが冊子には不在である。冊子は「快適な飛行」という表現によって現実の飛行を冊子の中に呼びこみ、現前する要素Gの重要性を正当化する。このように現前と不在の間の振動によって、冊子は事物の中心としての性質を手にするのだ。

ロウ自身ははっきり言明しないが、重要なのは、不在の要素は語るまでもない自明の前提ではないということだ。例えば、もし「快適な飛行」がパイロットの動揺を抑えることではなく、高速で飛ぶ快感を意味するのであれば、冊子はGではなく飛行速度を最も重要なパラメーターとして語るかもしれない。自明の前提とは前もって存在するのではなく、現前を支える不在として語りの外部に追放されることではじめて自明の前提となる。

第二に、飛行機は美的な鑑賞の対象となる。TSR2冊子には機体を描いた様々な挿絵が収められているが、それらは政府高官にむ

けTSR2の技術的な能力をアピールするという冊子本来の目的だけでは理解できない要素を含んでいる。例えば、地平線に向けて飛行するTSR2のコクピットから見た光景を描いた表紙の絵は、地平線の向こうにいる敵との戦闘に向かう飛行機と、それが守る家々の風景との対比によって、飛行機の力強さを表す。また、森の手前で整備を受けている機体の挿絵では、森のアナロジーによって女性の身体を持つ放埒さが核戦闘機TSR2に重ねあわせられているとロウは分析する(139)。

彼の分析は恣意的に見えるかもしれない。挿絵から、「飛行機の力強さ」や「女性的な放埒さ」を想起する読者が、本当にいたのかどうか確認されていないからだ。しかし、挿絵による不在の語りは現前する技術的な語りと相互補完的に機能しうる。この時、二つの異なる語りは重なり合い、プロジェクトを支えることになる。

第三に、飛行機は重要な政治的決定の対象となる。ロウは、TSR2計画廃棄と新たな戦闘機の採用の政府決定を描く様々な語り(閣僚の日記や歴史家の記述)を分析し、それらが全く異なる状況に埋め込まれながらも相互に干渉し重なりあうことで、何が政治的に重要で何がそうでないかを決定していく過程を描き出す。しかし、プロジェクト全体を説明する語りは、その過程を消去し、政治的決定の多様性をひとつのリストの中の選択肢の多様性に書き換える。どの選択肢が選ばれたかは、前述した文化的バイアスの下に解釈され、政府の意思や社会的な利益といった単一の原因によって説明される。こうして政治的決定の中心が生み出され、その支配の下に個々

の語り (narrative) とそれが遂行する行為 (performance) はまとめあげられていく。

このように、近代的プロジェクトは不在と現前の間を行き来する種々の語りを重なり合わせることで政治的に重要な事物の配置を決定しているにもかかわらず、プロジェクトが自らを描き出す時その実践は消去され、代わって一つの中心をもった物語が現われる。この物語のメカニズムを、ロウは「樹木状」(arborescence) の論理と呼ぶ。それは、個々の語りを大きな樹木の各部に接続することによって確定的な性質を付与し、一つの根から発して分岐していく「全体としての物語」を形づくる。

樹木の論理に対して、ロウが提示するのは「ピンボード」の論理である(188)。ボードの上には、文章や画像、社会的、個人的な事柄、技術的、美学的な事柄、といった異質な要素が留められ、相互にリンクしあう。ここではフラクショナルな事物が語りにおいて現前と不在の間で振動しながら単一性を生み出す。

ここで、ピンボードの論理では、グローバルな資本主義、ジェンダー、エスニシティ、階層など重要な問題について語れず、政治的中立主義に陥るといふ批判が予想される。しかし、政治的不平等を生み出す事物の配置は、フラクショナルな論理によっても支えられている。近代的な語りの背後でプロジェクトが何を実践しているかを明らかにするピンボードの論理を分析することで、プロジェクトが排除している他の可能性を捉えることができるようになるとロウは結論づけている(199-203)。

本書は、世界を認識し働きかける近代的なプロジェクトにおいて、いかにその自己表象と実践が乖離しているかを明らかにする試みであると言えるだろう。単なる近代批判に留まらず、フラクショナルリィや樹木状の物語などの概念によって、その表象と実践の論理のモデル化を試みた点で本書は評価できる。また、ネットワーク概念に代わって振動の概念を提示し⁽¹⁾、政治的中立主義に陥ることを回避しようとするロウの試みは、ANTに対する従来の批判を乗り越えて、より一般的に有効な分析手法を構築しようとするものであり、独自の成果をあげていると言える。

しかし、理論構築とテキスト分析に偏った点は本書の主張の説得力を弱める結果となっている。ロウの提示するピンボードの論理は、我々が自明のものともみなしている語りの論理を相対化する上では有効なものであると言えるが、しかし彼が主張するように近代的な論理に代わるほどの力を持ち得るかは疑問だ。近代の表象と実践の乖離を明らかにした上で両者を新たな形で関係づける本書の試みは、いまだ萌芽的なものに留まっている。本書では採用されていない参与観察やフィールドワークなどの調査手法には、人類学においてANTよりも長い実践と理論の蓄積があり、これらの手法の導入によって、より説得力を持った研究が可能になると筆者は考える。

[注]

(1) 人類学とANTの理論的な相違については次を参照のこと。足立 明 2001 「開発の人類学—アクターネットワーク論の可能性—」 社会人類学年報 27 弘文堂。

(2) この問題に対する ANT の基本姿勢は次を参照のこと。ミッシェル・カロン&ジョン・ロウ「個人と社会の区分を超えて」『科学を考える…人工知能からカルチュラルスタディーズまで14の視点』岡田猛 ほか 編、1999、北大路書房。

(3) この織物は TSSR とというプロジェクトと無関係なものではない。語ることが、単に事物を叙述するだけでなく、事物を作り上げていくというパフォーマンス (行為遂行的) な性質を持っている以上、プロジェクトを説明する諸テクストの織物もまたプロジェクト自体をつくりあげているからだ。

(4) ロウは、安定性や機能性へと向かうネットワークの論理は、ネットワークのリアリティが流動的な働きに依存しているにも関わらず、空間的な他者性を締め出す傾向があると論じている。John Law 2002 *Object and Space, Theory, Culture&Society* 19 (5/6).

〔参考文献〕

- デュモン・ルイ 1993 (1983) 『個人主義的論考—近代イデオロギーについての人類学的展望』渡辺公三・浅野房一訳 言叢社。
- 宮武公夫 2000 『テクノロジーの人類学』岩波書店。
- ラトゥール・ブルノー 1999 (1987) 『科学が作られているとき…人類学的考察』川崎勝・高田紀代誌訳、産業図書。
- Callon, Michel 1986 "The Sociology of an Actor-Network: The Case of Electric Vehicle". in M. Callon, J. Law and A. Rip (eds.) *Mapping the Dynamics of Science and Technology, Sociology of Science in the Real World*, pp. 19-34. The MacMillan Press.
- Law, John and John Hassard (eds.) 1999. *Actor Network Theory and After*. Blackwell.
- Latour, Bruno. 1993 *We Have Never Been Modern* translated by Catherine Porter, Harvard University Press.